

Title	シスモンディの信用論：銀行信用を中心として
Sub Title	Crédit de Simonde de Sismondi
Author	中宮, 光隆
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1978
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.71, No.5 (1978. 10) ,p.876(248)- 888(260)
JaLC DOI	10.14991/001.19781001-0248
Abstract	
Notes	遊部久蔵教授追悼特集号 論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19781001-0248

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シスモンディの信用論

—銀行信用を中心として—

中 宮 光 隆

序

第1節 貨幣と資本の区別

第2節 銀行券および銀行信用の意義と限界——銀行信用(1)——

1 貨幣流通法則と銀行券

2 媒介機関としての銀行

第3節 節約規定と銀行資本——銀行信用(2)——

小 括

序

古典派経済学の補完者と位置づけられているシスモンディ (J. C. L. Simonde de Sismondi, 1773-1842) が、その初期の著作である『商業的富について』 (De la Richesse commerciale, ou Principes d'Économie Politique Appliqués à la législation du commerce, 1803) におけるスミスの祖述から『経済学新原理』 (Nouveaux Principes d'Économie Politique, ou de la Richesse dans ses Rapports avec la Population, Paris, 1819. 2^{ed.}, 1827) にいたってスミス体系の修正へと転回したことは、彼自身が『経済学新原理』初版序文で述べているところであり、周知の事実である。しかし、その中で信用論においては「銀行と信用との作用に関してアダム・スミスが行なった分析には、われわれが付加すべきことは何もない⁽¹⁾」と彼は述べているのである。確かに彼の貨幣論・信用論の個々の論点には、スミスの理論をそのまま踏襲している論点も少なくない。しかし、その内容に立ち入ってみると、スミスを超越している点あるいは逆に後退とも思える点なども多く、スミスとはちがったシスモンディ独自の信用論体系が形成されているのである。

マルクスも『剰余価値学説史』で、信用論を研究する際にシスモンディを批判的に検討すると述べている。⁽²⁾ 実際『資本論』第3部第5篇の信用論の中には、シスモンディの信用論にあい通じる叙

注(1) Sismondi, Nouveaux Principes d'Économie Politique, 1819, tome 2, p. 94, 菅間正朔訳『経済学新原理』世界古典文庫 下 79ページ。

(2) Marx, Theorien über den Mehrwert. Werke, Bd. 26, 3 Teil, S. 48, 『マルクス=エンゲルス全集』大月書店, 第26巻第3分冊, 59ページ。

ここを根拠に、吉原泰助教授はシスモンディの信用論研究の意義を述べておられる(経済学史学会編『資本論』の成立, 1967)。遊部久蔵教授も吉原教授の論文を紹介しつつ同様の主張をされている(『経済学史学会年報』第6号, 1968)。

述も少なくない。古典派経済学とくにスミスから、シスモンディ、マルクスへの流れの中で、彼の信用論を特徴づけることも有意義であろう。

本稿では、別稿の「シスモンディにおける無形資本の概念について——信用論の一側面——」⁽³⁾をふまえ、彼の銀行信用論を中心に考察する。ここで扱う彼の銀行信用論と別稿で扱った無形資本論は、彼の信用理論体系でともに基軸をなしているといえる。さらにいえば、本稿第1節で取りあげた貨幣と資本の区別は、後述のようにスミスを乗り越えた見解であるとともに彼の銀行信用論展開のうえでの理論的前提のひとつであるという点で、重要な意味をもっている。しかし、その反面シスモンディにおいては貨幣と資本の区別が強調されたあまり、銀行信用がきわめて限定的に捉えられてしまったといえる。それによって逆に節約規定でスミスより後退するとともに、架空資本を銀行信用との関係で捉えることができなくなった。別稿で扱った無形資本は、まさにこのような彼の信用論展開の所産であるといえよう。

第1節 貨幣と資本の区別

シスモンディ信用論の特徴のひとつは、貨幣と資本との区別が強調されていることである。彼は、その主著『経済学新原理』の第5篇第3章で、「貨幣と資本との本質的な区別」という標題のもとに、両者を同一視する誤謬を指摘している。同時にこれは、『経済学新原理』における論理展開上、貨幣論と信用論のいわば結節点となっている。これ以前の諸章で貨幣の機能および流通量に関して論述した後、シスモンディは、貨幣の役割と機能によって大多数の人々は貨幣が「労働の動力因でありまたすべての富の創造者であると思ひ込」⁽⁴⁾んでいるのだが、それは「幻想」であると述べている。このことは、たとえば資本の増加は「労働の鼓舞」⁽⁵⁾すなわち追加労働力の雇用をもたらすが、貨幣の増加にはこの効果がないとか、資本は「富の再生産を有効ならしめ」て「年所得を生じる」⁽⁶⁾が、貨幣は不妊である、という点からも明らかであるという。これに続けてシスモンディは、同じ第4章の中で次の如く述べている。

「各々の製造業者や大商人の流動資本のほとんど全部は、買い手から売り手へと回転するに当って、次々に貨幣の形態をとって立ち現れる。だが、商人が貨幣で持っている彼等の元本のこの部分は、通常取引に用いられる資本のきわめて僅少な一部分であるにすぎない。まさにこの資本の大部分は、現物で彼の店舗ないしは彼の債務者の店舗にある。他方では、その商品をわずかの利得で売ったり、あるいは債務者にたいする債権を割引することによって、商人が所持する通

注(3) 三田学会雑誌第71巻6号掲載予定。

(4) Sismondi, op. cit., p. 17. 前掲邦訳書21ページ。ただし訳文は訳書どおりではない部分もある。(以下同様)。

(5) ibid.

(6) ibid.

貨量を一時的に増すかどうかは、ほとんど常に各々の商人次第である。この方法で彼は望む時に貨幣を手に入れるが、それがために富むものではなく、この貨幣は彼の資本に付加されるどころか、その資本をもって買われたものなのである。……事実、市場には支払いをするための貨幣が非常に多くなり、金銭はきわめて豊富となるであろうが、しかし貸し付けのために提供される預託金は多くも少なくもならず、利率はその結果として何等影響されないであろう。商業市場の動きに通曉している人々は、市場には金銭が逼迫していて資本が潤沢であるという場合があり得ると同様に、金銭が豊富でしかも資本が逼迫していることもあるのを熟知しているのである⁽⁷⁾。

ここで注目される点は、第1に、シスモンディがスミスと同様に、一方で貨幣を流動資本の一構成部分に含めながら、他方でその貨幣を資本の回転による形態転換の一局面としての貨幣資本と措定していることである。商人や製造業者が随時に手に入れる貨幣は、「その資本をもって買われた」、つまり商品の販売=実現によって得られた、資本の一形態としての貨幣資本なのである。もっとも、後段で述べられている貸付のために提供された預託金の内容が、たんに資本の回転の一局面としての貨幣資本を指しているのか、それとももっと幅広く貸付可能な貨幣資本のすべてが含まれているのかが不明瞭であり、その点で曖昧さを残しているといえる。

先きの引用文で第2に注目される点は、貨幣や資本の多少を動的に捉えていることである。とはいえその論述は漠然としているし、明確に産業循環の局面交代として位置づけているわけでもない。

これらを通じてここで第3に注目されるべき点は、貨幣と資本が峻別されていることであって、これが最も重要である。もちろんシスモンディは、貨幣そのものを価値尺度や流通手段、蓄蔵貨幣などの諸機能において捉え、しかも貨幣それ自体がすなわち国富なのではないという重商主義批判としての古典派の立場に立っている。しかし、この引用文における貨幣は、そのような貨幣論次元の貨幣ではなく、第1点でもふれたように、資本の一形態としての貨幣資本を指していて、ここではその両者の相違が強調されている。だからこそ、流通手段あるいは支払手段としての貨幣の逼迫と同時に生じる資本の潤沢(むしろ過剰)やその逆の事態が認識されるのである。スミスの場合には、一方では貨幣を流動資本の一部としつつ、貨幣は食料品・材料・完成品など流動資本を構成する他の諸要素と異なって勤労の量の決定には加わらないと述べてはいるが、他方では銀行券が導入されると、銀行券の発行によって節約された金・銀貨が海外に送られて、ぜいたく品を購買しない限り「ある新事業を運営するために創設された一種の新基金のようなもの」とか、社会の「消費を維持するための恒久的な基金を確立する」⁽⁹⁾との論述にもみられるように、貨幣と資本の峻別が必ず

注(7) *ibid.*, pp. 40-42. 前掲邦訳書 40-41 ページ。

(8) A. Smith, *Wealth of Nations*, ed., Cannan, I. p. 278. 邦訳、大内・松川訳『諸国民の富』岩波文庫第2分冊 268 ページ。

(9) *ibid.*, pp. 277-278. 前掲邦訳書 266ページ。

しも明瞭ではなかったと言わざるを得ない。この点に関する限り、シスモンディの主張は、スミスの理論を超えているといえよう。

そればかりではない。貨幣と資本の区別に関するシスモンディの論述は、マルクスが批判するトウクのそれとも異なっている。すなわち、トウクにおける貨幣と資本の区別は、スミスが指摘した商人と商人との間の取引と商人と消費者の間の取引という二つの流通部面の分類をそのまま貨幣と資本の区別に適用して、銀行業務のうち「資本を直接に使用しない人たちから資本を蒐めて、使用する人たちにこれを分類または移転する」業務がスミスのいう商人と商人との間の流通に、また「(銀行の)顧客の所得の預託を受けて、顧客が消費の対象物に支出するのに必要とする額を払出す」業務がスミスのいう商人と消費者との間の流通に照応すると主張し、前者を資本の流通、後者を貨幣の流通と規定しているのである。⁽¹¹⁾シスモンディも、スミスに倣って流通局面をいわば商業流通と一般流通に分類している。しかし彼は、この流通局面の相違を貨幣と資本の相違に一致させているのではなく、後述のように銀行券の流通に適する局面を摘出する際にふれているにすぎないのである。⁽¹²⁾

シスモンディは、晩年の論文集『経済学研究』⁽¹³⁾でも貨幣と資本の区別を強調している。彼は、「流動資本は貨幣と同一物ではない。いや逆に流動資本は、絶えず貨幣と交換される」と主張した後、⁽¹⁴⁾「流動資本が抽象的な捉えどころのない量であるのと同様に、また流動資本がつねに貨幣の助力で移転されるのと同様に、そして流動資本がそれを代表する金銭の数によっては決して示されないのと同様に、流動資本は、しばしば事情に最も精通している人々によってさえ貨幣と混同されている。商業に関するほとんどすべての文献は、適切でないために、この混乱を増大させている。貨幣がほとんどない、貨幣が豊富である、などと言われる。そしてこの表現が、貴金属にではなく、流動資本や無形資本に用いられる。支払うべき負債が多い場合には貨幣が少なく、債権の設定を申し出る人々が多い場合には貨幣が豊富だと言われる」⁽¹⁵⁾と述べている。シスモンディによれば、この最後の表現は明らかに誤りである。支払うべき負債が多い場合に不足しているのは、貨幣ではなく貨幣資本の形態にある資本だからであり、もう一方の場合も豊富なのは資本だからである。貨幣形態をとっていようと商品形態をとっていようと、あるいはまた無形資本の形態をとっていようと、どの局面にあっても、資本として機能する限りそこにあるのは資本である。この点の主張は、『経済学新原理』と『経済学研究』を通じて一貫している。ただし『経済学研究』では、資本の内容に、資本

注(10) *ibid.*, p. 305. 前掲邦訳書 320ページ。

(11) T. Tooke, *An Inquiry into the Currency Principle*, 1844, p. 36. 玉野井芳郎訳『通貨原理の研究』世界古典文庫 79 ページ。Vgl. Marx, *Das Kapital*, Werke, Bd. 25, Teil 2, p. 458. 邦訳『マルクス=エンゲルス全集』第25巻第2分冊, 564-565ページ参照。

(12) Sismondi, *op. cit.*, pp. 85-90. 前掲邦訳書 73-76ページ。

(13) Sismondi, *Étude sur l'Économie Politique*, t. 1, 1837, t. 2, 1838.

(14) *ibid.*, t. 2, p. 390.

(15) *ibid.*, p. 395.

の回転の各局面でさまざまな形態をとる資本だけでなく、いわゆる利子生み資本(moneyed capital)も含まれている点が注目される。流動資本とともに無形資本があげられており、シスモンディによればこの無形資本を投下対象とするものの中には貸付資本家の貨幣資本が含まれているからである。^(15a)

このようにシスモンディは、貨幣と資本の区別を強調し、この点ではスミスの曖昧さを克服した。しかも貨幣と資本の相違を、マルクスの批判の対象となった『通貨原理の研究』を著した際のトウックの場合のように収入の流通と資本の流通との間の相違と混同せずに、より正確な視点で論述しているといえるだろう。

第2節 銀行券および銀行信用の意義と限界

— 銀行信用(1) —

1. 貨幣流通法則と銀行券

シスモンディの貨幣論で最も注目すべき点のひとつは、彼が貨幣数量説を批判する立場に立っていることである。彼の主張によれば、一国で販売される「価値の総額」と、その支払いに用いられる、流通速度によって調整された貨幣量との間には「必然的な等式が存在する」⁽¹⁶⁾。もっとも、その取引総額や貨幣の流通速度や取引に必要な貨幣量そのものは、正確に計測することはできない。しかし、「たとえその総額が如何にもあれ、その額は何等その国に存在している貨幣の量に依存するものではないことは、確実である」⁽¹⁷⁾。みられるようにシスモンディは、「移転の手段」すなわち貨幣量が取引総額を決定するのではなく、取引総額が貨幣量を定めるとの認識の下に、貨幣の流通法則を論述しているのである。もちろんそこには、金属貨幣は、新たな鉱山の発見やより生産的な採掘方法が発明されない限り、「一定の、その量からまったく独立した価値を持っている」との前提がある。商品の「移転の手段が不足している場合には、商業は外部からこれを引き寄せるであろうし、またもしそれが過剰になっているならば、それを送り返すことになるだろう」。なぜならば、「それは商業がそれらの貨幣を使用することもできないからであり、さらにまたこの運動を規定するのは、これらの移転の手段ではないからである」⁽¹⁸⁾。流通必要量を超過した金属貨幣は、流通の水路を溢れ出し、蓄蔵されたり銹潰されて装飾品などとして消費されたり、あるいは輸出されてしまう。このように、商品取引総額を与件と捉え、それによって流通必要貨幣量が決定されるとのシスモンディの考え方は、必要量を超えた貨幣の扱われ方は別にして、スミスの正しい認識を継承しているといえよう。

注(15a) この点に関しては、前掲拙稿『シスモンディにおける無形資本の概念について—信用論の側面—』参照。

(16) Sismondi, *Nouveaux Principes*, t. 2, p. 120. 前掲邦訳書 97ページ。

(17) Sismondi, *Étude*, t. 2, p. 399.

(18) Sismondi, *Nouveaux Principes*, t. 2, pp. 15-16, 前掲邦訳書 19-21ページ。

この貨幣の流通法則は、シスモンディの場合、銀行券が導入されてもそのまま妥当すると考えられている。第1に彼は、発行された銀行券が流通に投入されると、それに対応する額の金銀貨幣が流通の水路から排除されると想定する。⁽¹⁹⁾第2にもし必要量以上の銀行券が発行されれば、この場合は銀行券を海外に送り出すことはできないから、銀行券の超過分は兌換を求めて銀行に還流するという還流法則の成立が認められている。

しかし、シスモンディは、銀行券発行を無条件に容認しているわけではない。まず彼は、銀行家が銀行券を流通部に放出する通常の方法は長期の商業手形の割引だと述べる。これが金属貨幣ではなく銀行券で為されるのは、「これらの銀行券は、もっぱら大きな金額の識別と運搬の困難と危険とを避けるためのものであって、これこそ、それらを利用する商人がそこに見出す唯一の長所である」⁽²⁰⁾からである。商業手形は一般に高額であるし、企業家は相互に手形を持ち合い、その金庫の中には支払準備金としてある程度の銀行券を含む貨幣を保管している。このような場合、銀行に不安を感じない限り人々は銀行券を兌換しようとは思わないだろう、そしてそこにこそ銀行券の流通に適した水路があると彼は考える。これにたいして、おもに所得の流通でみられる小額の取引の場合、銀行券の使用は不適當である。なぜならば、銀行券が小額になればその運搬や識別にあたって金属貨幣と同程度の労力や時間を費すことになって金属貨幣を銀行券に置換したメリットがなくなるばかりでなく、さらに銀行券の贋造や破損・紛失の危険が増大するからである。したがって彼は、所得の流通に用いられる小額の銀行券を発行すべきでなく、銀行券の発行は、商業流通でのみ用いられる高額券に限定されるべきであると主張する。

それでは高額銀行券が商業流通の部面でのみ流通していればそれで問題がないかという、そうではない。銀行券そのものに確実性や安定性の欠除という重大な欠点があるのである。「疑いもなく、銀行券は、流通に供給された通貨よりも経済的な流通手段である。しかしそれは、確実性・規則性・道徳性という点でこのように劣った手段であるから、この種の節約によって国民にとって最も重要なものを危くする場合には、彼らは余りにも軽率だ」⁽²¹⁾。同様のことは『経済学研究』でも述べられている。「銀行に頼る人々は、価値の担保ではなく価値の章標を持っているにすぎない場合、彼が便利さにおいて得る以上に安定性において失うということを遠からず感じるだろう」⁽²²⁾。銀行券の発行によって確実性や安定性が失われるのに対処するために、シスモンディは、銀行券を発行する銀行はつねに一定の準備金を保持すべきだと主張する。「静隠にして平常な時代には貨幣は表象によって代理されてもよいのであるが、しかし危険が迫ってあらゆる信用証券⁽²³⁾ (billet de confiance)

注(19) *ibid.*, pp. 102-103, 前掲邦訳書 85ページ。

(20) *ibid.*, pp. 84-87, 前掲邦訳書 72-74 ページ。

(21) *ibid.*, p. 111, 前掲邦訳書 91ページ。

(22) Sismondi, *Étude*, p. 405.

(23) シスモンディは、銀行券も信用証券に含めている。

(24) Sismondi, *Nouveaux Principes*, t. 2, p. 104, 前掲邦訳書 86ページ。

が役に立たなくなるときに、国防のためにもせよ、必要なときには現物形態で再顕することができる⁽²⁴⁾ということが、社会の安全にとっては肝要なことなのである。

ここでみられるように、シスモンディの銀行券に関する論述は、流通部面を商業流通と一般流通に二分割する点でも、銀行券の発行を高額券に限定してその流通部面を商業流通にとどめようとする点でも、⁽²⁵⁾スミスの理論を踏襲しているといえよう。しかし後述の如く、銀行券による金属貨幣の代替のメリットを資本の節約または生産の拡大にありとするのではなく、たんに金額の識別や運搬の困難と危険の回避という点においているのは、シスモンディの理論の弱点である。

2. 媒介機関としての銀行

シスモンディは、少なくとも叙述に明示された限りでは信用は資本を創造せず銀行は資金の移転の媒介機関にすぎないと主張する。彼の著述の中でこの点の主張は随所に見られるが、とくに『経済学新原理』の第5篇第8章は、「信用はそれが支配する富を作り出すものではない」という標題の下にこの点の論述に充てられている。

「何よりもまず、信用は、決して何等新しい富を創出するものではないということ、信用は社会の資本に何物をも付加せず、その為し得るすべてのことは、結実しなかった資本の一部を結実し得るものにするのであるということ、十分に実証することが重要なのである。信用は、一般に富を移転させるにすぎないのであって、それは、ある者に属しているものの処分を他の者に委ねるが、各自をして以前と同様に富みあるいは貧しいままにしておく⁽²⁶⁾」。

『経済学研究』でもこの主張が繰り返されている。

「銀行制度の危険は、諸事情に精通しているとみられる人々自身の間で言いふるされた謬論によって、また彼ら自身の貪欲に役立たせるためのこの誤謬を信用させるべくなされた努力によって、無限に増大されている。また毎日われわれは、信用創造能力について、国民の財産を流動化することの重要性について、資金不足にみまわれたときに銀行が工業、農業、負債で圧迫されている所有者、それに商業に与えることができる援助について、語られるのを聞いている。しかしながら、信用は決して何も創造しない。それはただ借りるだけであり、すでに存在している資本を移動するだけである。……彼ら(銀行家)は、水路が排除するほど余分なまでの紙券(papier)を流通に投入することによって、資本を創造した⁽²⁷⁾と思っている」。

銀行には信用創造をする能力がない。銀行は銀行券を発行するが、それは銀行に預金された金属貨幣と置換されたにすぎない。だから「銀行は、右手で貸すために左手で借り⁽²⁸⁾」ているにすぎない。

注(25) Smith, op. cit., pp. 305-306. 前掲邦訳書第2分冊 320-323ページ。

(26) Sismondi, Nouveaux Principes. t. 2, p. 94, 前掲邦訳書 79ページ。

(27) Sismondi, Étude. t. 2, p. 414.

(28) Sismondi, Nouveaux Principes. t. 2, p. 97. 前掲邦訳書 81ページ。

い。銀行が貸し付けを拡大するために銀行券の発行高を増加させても、それによって資本が創造されたわけではないから、その銀行券は流通の水路から排出され、結局銀行に還流してしまう。銀行は資本の移転の媒介機関にすぎない。シスモンディが貨幣と資本の区別を強調する理由のひとつは、ここにある。

しかし、それだからといってシスモンディ信用論が信用創造をまったく無視したものというわけではない。彼自身が意識しようとしまいと、その論述の中には信用創造の考え方が包含されているのである。第1に、銀行が銀行券を発行するに際して、イングランド銀行の場合は発行額の2分の1から3分の1の準備金を必要としたが、銀行券発行の契機を安全確実な商業手形の割引に限定するならば準備金は10分の1でよいと主張されている。⁽²⁹⁾ ここには、いわゆる発券的信用創造の考え方が恐らくシスモンディ自身には無意識のうちに表明されている。こればかりではない。初版刊行の8年後に出版された『経済学新原理』第2版の本文に書き加えられた異稿の中に、「疑いもなく銀行の発明は、大きな節約をして、一国民の生産資本にその鑄貨の金価値を付加することを得させたのである」⁽³⁰⁾との記述がある。これもスミスの主張の借用であろう。⁽³¹⁾ しかしシスモンディは、これにすぐ続けて「だが、その節約の利益、あるいは生産の増大の利益は、一体何なのであろうか」⁽³²⁾と述べて、スミスとは逆に生産の拡大を消極的に捉えているのである。同様の論旨は、『経済学研究』でも見られる。「銀行の設立は、平穩が持続する限り一国における産業を動かすためのかなりの額の流動資本量を増加させる。銀行の設立は、社会に対して何の利益ももたらさずに犠牲を払わせるだけのものである通貨として用いられるはずだった貴金属の3分の1から多分2分の1を、社会には何の犠牲も払わせずに利益をもたらす観念的リーブルの等価値と交換する。銀行が熱望しうる最高の便宜は、⁽³³⁾ここである」。かくの如くシスモンディは、一面では金属貨幣の銀行券への置換、後者による前者の節約によって、生産資本が増加すると述べている。しかし、ここでも先きの場合と同様に、すぐ続けて資本の増加は、何等好ましいことではなく、むしろ商品の供給過剰と過剰取引に拍車をかけて事態を一層悪化させるものと捉えられているのである。それとともに『経済学研究』の別のところでシスモンディは、銀行で資本が創造されたと考えるのは幻想にすぎないと主張している。「各々の大商人は、最も裕福な人でも貨幣が不足して一時的な困窮を感じることもある。……困窮を感じなくとも、……彼に提供される資本の助力で活動を拡大させ得るということを、しばしば彼は非常に喜ぶのである。同時に、最も冒険的な人々、最も裕福ではない人々は、いつでも資金を必要としていて、彼らは、可能な限り信用を拡張する機会を貪欲に追求する。結局すべての人々は、

注(29) *ibid.*, t. 2, p. 92, 前掲邦訳書 77ページ。

(30) Sismondi, *Nouveaux Principes d'Économie Politique*, 2^eéd., 1827. t. 1, pp. 139-140. 前掲邦訳書281ページ。

(31) Smith, *op. cit.*, p. 279. 前掲邦訳書 269ページ。

(32) Sismondi, *Nouveaux Principes*. 2^eéd., p. 140. 前掲邦訳書 281ページ。

(33) Sismondi, *Étude*. t. 2, p. 415.

(34) *ibid.*, pp. 405-406.

彼らの下に作られたように見えるこの資本の創造に幻想をもたせられている⁽³⁴⁾。銀行によって資本が創造されたと思うのは、幻想にすぎない。その幻想が破られれば、過剰取引の一層深化した事態が現れる。

このように信用創造に関するシスモンディの叙述は、やや錯綜しているといえる。『経済学新原理』初版の段階では、銀行は何ら資本を創造しないと主張されている。しかし、同じ『経済学新原理』の第2版以降とくに『経済学研究』においては、一方では銀行は資本を創造しない、すなわち信用創造はないとの主張がなされつつ、他方では銀行は資本を増加させるとも言われているのである。この晩年のシスモンディにおける一見矛盾した論述は、彼の論理の二重構造に由来すると思われる。すなわち、信用創造否定論は彼にとって規範であり、信用創造肯定論は実態なのである。規範として信用創造を否定する彼は、それにもかかわらず実態として銀行による資本創造を認めざるを得ないのである。信用創造を肯定的に述べたあと、それが幻想だと否定するのは、再び議論を規範に引き戻しているからであろう。いわば規範と実態の二元論が、彼の信用論を複雑にしているといえよう。

信用創造を積極的には認めず、銀行を資本の移転の媒介機関と位置づけるシスモンディは、銀行の役割は商業手形の割引と国庫の歳入歳出への奉仕にあるとみている。「銀行が、その適する唯一の業務、すなわち短期の商業手形の割引だけに限るならば、企業家に対して誠に正当な利益を与えるのであって、まず商業にとっては有益なのであり、銀行は若干利子率を低下させ、とりわけ利子〔率の水準〕を規定して均一にすることに貢献する⁽³⁵⁾」。もし銀行がなかったならば、借手は確実に必要なときに貸手を見出すことはできないし、ことに貸付条件は貸手の意のままになると彼は考えている。すなわち、銀行のメリットのひとつは、利子率の低下と均等化、借手にとっての借入れの確実性と迅速性、それに高利貸からの保護などの点に見い出されているのである。さらに彼は、「しかしながら、銀行は、商業の支柱たるよりもむしろ政府に奉仕する一大機関であり、銀行だけが、しばしば行政に必要な多額の前貸しをしたり、地方債の割引をしたり、募債の取引を容易ならしめたり、最後に国家とその債権者との間に仲介者を置くことのできる位置にいるのである⁽³⁶⁾」と述べている。これ以前の箇所ですでに彼は、銀行券が流通するひとつの局面として、政府収入の流通をあげている。地方収入の国庫への引渡しや国庫から御用商人や公共事業の企業家への支払いなどは巨額になり、したがってここでは銀行券が適している。募債を含めて国庫の歳入と歳出が円滑に行なわれるよう奉仕する機関として銀行が位置づけられている。また、「行政への前貸し」や「地方債の割引」を銀行は何で行なうのかが必ずしも明確ではないが、銀行が「募債の取引を容易」にするとか「国家とその債権者との間に仲介者を置く」位置にいるという表現から、ここでもシスモンディは

注(35) Sismondi, *Nouveaux Principes*, t. 2, pp. 117-118, 前掲邦訳書 95ページ。

(36) *ibid.*

銀行を媒介機関と位置づけているということが窺える。銀行の一方の役割として挙げられていた商業手形の割引の場合も、確かにそれを銀行は銀行券で行なうのであって、そこには発券的信用創造の論理が介在しているのだが、シスモンディ自身はそれをまったく意識しておらず、むしろ彼の論旨からいえばそれは、「右手で借りて左手で貸す」銀行にとって最も安全な業務なのである。

このように、シスモンディにおける銀行の位置づけの特徴は、銀行は、みずからは何ら資本を創造せず、たんに資本の移転を媒介する機関にすぎないという点にある。

第3節 節約規定と銀行資本

— 銀行信用 (2) —

貨幣と資本の区別を強調し、貨幣の流通法則を銀行券にも適用し、銀行を媒介機関として位置づけるという特徴をもったシスモンディの信用論に、なお重要と思われる2つの論点が残っている。そのひとつは節約の捉え方であり、他のひとつは銀行資本の内容の規定に関してである。

すでに述べたように、シスモンディは、銀行券が発行され金属貨幣がより経済的な流通手段である銀行券によって代替されると、一面では確実性や規則性、道徳性が失われると主張しているが、他面ではそれが節約であることも認めている。⁽³⁷⁾ この場合の節約の内容は、主として大商人間における巨額の取引に伴う大量の貨幣の「識別と運搬の困難と危険」を回避すること、すなわちいわば貨幣を計算し移動する際の労力の節約ということであった。この見解は、『経済学研究』でも述べられている。「民衆は、〔銀行券による〕この代用で、ある場所から他の場所へ鑄貨を持ち運ぶ労と計算する労を節約するということを得るにすぎない」⁽³⁸⁾。かくの如き節約の捉え方は、明らかにスミスのそれと異なっている。スミスの場合には、銀行券による金属貨幣の代替は、置換された金属貨幣が新事業や社会の消費の恒久的な基金になると考えようと、あるいはその価値額だけ原材料や生活資料が増加すると考えようと、いずれにしても生産を拡大させると捉えられている。節約された貨幣が、いわば生産資本またはそれに類するものに転化すると見做されているのである。これに対してシスモンディの場合には、金属貨幣の銀行券による置換によって節約された貨幣が生産資本化するとはまったく考えられていないのである。この点でシスモンディは、スミスよりもむしろ後退しているといえよう。

シスモンディが節約による生産の拡大を見落した主たる原因は、節約される対象を金属貨幣そのものよりもその移転の労力と考えていたことにあるといえる。しかし彼は、節約された金属貨幣に関して、まったく何も語っていないわけではない。『経済学研究』で彼は次の如く述べている。

注(37) 注(20)の引用文参照。

(38) Sismondi, Étude, t. 2, p. 404.

「銀行は、正貨 (numéraire) を銀行券 (ses billets) で置き換えるよう、また以前にエキュ一貨 (écus) でしていたのと同じ流通を紙券で遂行するよう提案している。それゆえ銀行は、その銀行券によって正貨を回収するし、もっとしばしば銀行は、流通中の貴金属を回収する原因となる。銀行はそれを鑄潰し輸出する。同時に銀行は、公共の財産のうち通貨で預託された部分の処分権を得て、それを社会で節約させる。銀行が借入をしたいと思っている人に貸し付けるのは、観念的リープルで見積られたこの部分である。ここには、信用による富の創造はなくて、用途の変更があるにすぎない⁽³⁹⁾」。

みられるように、彼は、銀行券の金属貨幣との代替によって後者が節約されることを認めている。しかし、それにもかかわらず彼は、節約された金属貨幣が溶解されて輸出されると主張するにとどまっておらず、それが生産の拡大に寄与するとは考えていないのである。その理由は2点考えられる。第1の理由は、貨幣と資本の区別にある。彼の論理によれば、銀行が発行した銀行券によって代替された金属貨幣は、流通手段としての機能をはたす貨幣そのものであって、資本ではない。銀行券発行による金属貨幣の節約と資本の増加とは、まったく次元の異なる問題なのである。第2の理由は、彼が銀行を資本の移転の媒介機関と見做し、信用創造を否定する点にある。彼の意識の中には発券の信用創造の論理がないから、節約された金属貨幣が銀行に還流してもそれによって銀行券が一層増発されるとは考えられない。また銀行による商業手形の割引の場合も、彼の主張の力点は、手形割引によって得られた貨幣は支払手段として用いられるという点にあるのであって、新たな生産資本への転化すなわち購買手段として用いられるという点にあるのではない。

ところで信用による節約には、このような銀行券による金属貨幣の節約とは別に、支払準備金などの眠った資本、スミスの言うレディ・マニの節約もある。シスモンディは、次のように述べている。

「これまで銀行は、たんに支払を単純にし、貨幣の無用の移転を節約し、仮に銀行が無いとした場合よりもより少ない額の正貨で流通を容易にするということしかしなかった。だがある者は、不妊の貨幣の少量が取引に用いられることによって、利益を受けたに相違ない。前には何等の利子をももたらさなかった資本の一部は、結実する資本に転化され得たはずであり、そして誰かがその果実を受取らねばならなかった。……ロンドンや、さらに銀行家がたんに商人の出納係として設けられたところでは到るところにおいてこれらの銀行家はその結果として生じた貨幣の節約から利益を得たのであり、それがすなわち彼等の営業の利得なのである」⁽⁴⁰⁾。

かくの如くシスモンディは、遊休資本の運用が利益をもたらすことを認めているのである。しかし、ここでも彼の主張はスミスと異なっている。第1にスミスはレディ・マニが銀行業者によって

注(39) *ibid.*, pp. 408-407.

(40) Sismondi, *Nouveaux Principes*, t. 2, p. 83. 前掲邦訳書 71ページ。

生産的な資財に転化されると述べているが、シスモンディはたんに利子をもたらすと語りだけである。第2に最も特徴的なことは、シスモンディが遊休資本を活動させたことによって得る利益を銀行家が取得すると主張していることである。したがって彼の場合には、産業資本家はそこから何も得ず、蓄積せず、したがって生産の拡大も不可能なのである。かくして彼の節約規定から生産拡大の要素が欠落してしまったのである。

他方、シスモンディは、銀行資本に関連して次のように述べている。

「銀行は、その流通証券によって銀行が自由にできる新たな資本を実際に持っているように見受けられるのであるが、だがこの資本は銀行に属するのではなく、銀行の金庫から金銭を引出す権利を持っていて、信用してそこに預けておく人々に属するものなのである。

一般に銀行は、このような信認に応じ、それを獲得するために、貸手に担保を提供する。イングランド銀行は、担保として通貨で寄託された最初の株式価額を提供した……。

銀行のこの資本は、その信用の基礎として役立つのであるが、それは信用の原因であってその結果なのではなく、株主の財産の一部から成っているのであって、それは、銀行券の所持者の請求があるまで銀行に預金されていて、銀行が自己の信用によってこの請求がある前に利用している貨幣と決して混同されるべきではない。

この後者は、たんに銀行が現に流通に付加している資本の一部にすぎず、それは、大商人の金庫の中に死蔵されているべきはずの貨幣であり、それを銀行が持出して自己の銀行券に換えて自ら貸付ける貨幣⁽⁴¹⁾なのである」。

すなわちシスモンディは、銀行自身の資本と銀行に預けられた預金を峻別することが重要だと述べている。すなわち彼は、預金を銀行資本の一構成部分と考えないばかりか、銀行資本を銀行自身の株に投下されたものだけに限定しているのである。一方、銀行に預け入れられた預金は、確かに預金者の資本だと規定されているが、その形態は金銭すなわち現金である。ここで特徴的なことは、貨幣の貸借が強調されている反面、マルクスが銀行資本の一構成部分として挙げた利子付き証券などの架空資本が取り扱われていないことである。預金の受け入れは金属貨幣（あるいは銀行券）で行なわれ、貸し付けは商業手形の割引によってなされるという彼の捉えている銀行業務の内容、あるいは資本（ここで表象されているのはやはり金属貨幣または銀行券である）の移転の媒介機関という彼の銀行の位置づけから言えば、ここで架空資本が扱われないのも当然とも言えよう。とはいえ、シスモンディに架空資本の理論がまったくないというわけではなく、それは無形資本として、銀行信用から切り離されて論述⁽⁴²⁾されているのである。それはともかく、少なくともシスモンディの銀行資本の内容、あるいは銀行信用論の展開の中に、架空資本が扱われていないことは確かである。

注(41) op. cit., pp. 96-97, 前掲邦訳書 80-81ページ。

(42) この点に関しては、前掲拙稿参照。

小 括

以上、シスモンディの信用論を、とくに銀行信用を中心に考察してきた。彼は、スミスが曖昧にした貨幣と資本の区別を明白にした。この点は信用理論史の中でその進歩に貢献した点であると評価されよう。またこの区別は、恐慌の根本原因がたんに貨幣政策にあるのではなくて、需要の不足という再生産過程そのものの不均衡にあるということを彼に認識させたという点で、彼の経済理論体系全般に関わる重要なテーゼであった。しかし他方で彼は、この貨幣と資本の明確な区別によって逆に彼の信用論に2つの点で不十分さを残すことになった。その第1は、資本の節約の契機を見落したことである。スミスの場合には、貨幣と資本の区別は不明瞭であったが、節約された貨幣の資本化、生産規模の拡大という点を見通していた。シスモンディの場合には、この点が欠落していたから銀行券の発行やそれに伴う貨幣の節約と、再生産過程との関係が不明瞭になってしまった。この弱点は、次の銀行信用においても残っている。第2の問題点は、銀行の役割をたんに媒介機関とのみ規定したことである。このことから、さらに彼の議論に2つの限定が加わる。第1は銀行による信用創造を少なくとも規範としては認めなかったこと、第2は銀行資本の成分の中に架空資本を見い出せなかったことである。その結果シスモンディは、架空資本（彼の言う無形資本）を銀行信用との関連で展開することができず、それを銀行制度の枠の外で独自に展開せざるを得なかったのである。しかしそのような彼の信用論展開の不十分さは、逆にそこにシスモンディ独自の積極面を引き入れることになった。すなわち彼は、銀行を媒介機関として限定的に捉えることによって、逆に資本市場で運動する架空資本を見ることができたのではなからうか。彼の『経済学研究』における想像的資本は、この産物といえるだろう。マルクスが資本還元や架空資本の展開の中でシスモンディを取り上げているのは、まさにマルクスがシスモンディのこの点を評価したからであるように思われる。

（慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程）